

聖書：コリント人への手紙第一 14：20～25

説教題：神があなたがたの中におられる

日時：2023年1月1日（朝拝）

コリント教会の礼拝で生じていた異言の問題についての箇所を読んでいます。これは14章の最後まで語られます。異言とは14章2節で見ましたように、人にではなく神に向かって語られる言葉で、そのままでは周りの人々に理解できない言葉でした。コリントではこれが特に強く現れていたせいか、人々は熱狂的にこの異言の賜物を求めたようです。そしてこれを話せる人は、これ見よがしに人前で語り、自分は霊的な人であると誇り、自己PRしていました。また互いに競い合っていました。こうしてコリント教会の礼拝には混乱と無秩序が生じ、そのことで教会内に分裂が生じてもいたようです。

そんな彼らにパウロは今日の箇所の20節で「兄弟たち」と呼びかけて、「考え方において子どもになってはいけません」と言います。コリント人たちは自分たちは霊的な人間、成熟した人間、より天国に近い状態に達している人間と自負していました。しかしパウロはすでに3章1節で彼らのことを「キリストにある幼子」と言っていました。キリストにある人、すなわちクリスチャンであることは認めているけれども幼子であると。ここでも今のままの振る舞いをするなら子どもであると言っています。子どもの特徴は何でしょうか。子どもには優れた点もありますが、パウロがここで言いたいことは自分中心的であるということでしょう。子どもは他の人のことはあまり考えません。自分のやりたいことをやろうとします。そしてしばしば表面的なもの、派手なものに飛びつきやすい傾向があると言えます。それはまさにコリント人たちの異言に対する態度に似ていました。彼らは御霊の派手な現れである異言に熱狂しました。そしてそれができると、それで自己PRをし、自分が皆に注目され、人より高く評価されることを求めました。それが他者にどんな影響を与えるかということとは良く考えず、まずは自分のことばかり考えている。それはまさに子どもであるということです。

悪事においては幼子であること、つまり無知であるのが良い。知らなくて良いことは沢山あります。パウロがローマ書16章19節で「私が願うのは、あなたがたが善にはさとく、悪にはうとくあることです」と言っているのと同じことです。「けれども、

考え方においては大人になりなさい」と言います。大人は子どもと反対に、他の人のことも考えます。むしろ他者を配慮し、周りの人々も祝福されることに思いを向けて自らの行動を律します。13章では愛に生きるべきこと、すなわち他者の益に仕える歩みをすべきことが語られました。その模範はイエス様です。ピリピ人への手紙2章4～5節:「それぞれ、自分のことだけでなく、ほかの人のことも顧みなさい。キリスト・イエスのうちにあるこの思いを、あなたがたの間でも抱きなさい。」 聖書が語る成熟した人とは、このイエス様に似る人のことです。自分のことだけでなく、他者のことも考えて自分の振る舞いを決める人。異言についてもそのように考える大人であれ！とパウロは言っているわけです。

パウロは21節で旧約聖書を引用して、一つの大事なことを話そうとします。引用されているのはイザヤ書28章11～12節です。これはアッシリア捕囚の警告を語った言葉です。イスラエルが預言者の言葉に聞かず、これを軽んじ、拒絶しているので、主は言われました。「わたしは、異国の舌で、異なる唇でこの民に語る。」 これはイスラエルがやがて他の国に征服され、外国へ連れて行かれるということを行ったものです。その外国の地で意味の分からない、理解できない言葉、すなわち外国語に取り囲まれるようになる。これは主を信じない彼らに対するさばきです。そして訳の分からない言葉に囲まれ、理解できる神の啓示が与えられないことによって、一層の不信仰へと固められてしまう。そういうさばきを受けるということが予告されていました。パウロはこのことと異言とを重ね合わせているわけです。

コリント人たちは得意がって異言を話していたかもしれませんが。しかし異言は、今見たイザヤ書の言葉から分かる通り、信じている者たちのためではなく、信じていない者たちのためのしるしであると22節で言われています。信じていない者たちが益々不信仰へと固められてしまうためのしるしです。その一方、22節後半にある通り、預言は信じている者たちのためのしるしです。信じて聞く耳を持っている人は、それによって益々神を知り、信仰の道を進むように導かれます。このように異言はそれだけではさばきの道具となるものであり、一方の預言は祝福をもたらす道具となるものです。

このことに基づいてパウロは23節のケースを取り上げます。それは教会全体が一緒に集まって、皆が異言で語っている時に、初心の人や信じていない人が入って来る

という場合です。ここの「初心の人」とは、16節に出て来た「初心者」と同じ言葉です。しかし16節は異言に対しての初心者、つまり異言を話すことができず、それを理解することのできない人たちという意味でした。そこにはすでに信者である人も含まれます。しかし今見ている23節では、キリスト教信仰について初心の人ということですから、その後の「信じていない人」と同じ意味であると考えられます。つまり未信者の人ということです。その人が、教会員みな異言で話している中に入って来たらどうなるか。当然理解できません。それどころか、「あなたがたは気が変になっていると言われることにならないでしょうか」とパウロは問います。つまり気が狂っている人たち、異常な人たちと思われたいだろうか。その結果、その人はその交わりに入らず、そこから出て行ってしまいます。このようにして異言は信じていない人を益々信じない歩みへと固めさせ、確定させてしまう。これが異言のもたらす効果です。そしてこれはこのケースにおいてももちろん望ましいことではありません。先のイザヤ書の文脈では、意図的に不信仰の道を行くイスラエルに異言が語られて益々不信仰に固められるということが言われました。しかしこちらにおいて信じていない人たちは意図的にそうしているわけではありません。まだ信仰の道を知らないだけです。そういう人々の前で異言を語ることは、その人々を一層の不信仰へと追いやり、神の祝福から遠ざけるものとなります。異言はそういう影響を未信者に対して持ちます。その観点からも異言の使い方については良く考え直す必要があるということをパウロは言っているわけです。

一方の預言はこれと対照的です。預言は神の言葉を預かって語ることであり、人々に理解できる言葉でなされます。24節で逆に、皆が預言をするなら、信じていない人や初心の人が入って来たとき、どうなるかと言われます。ここから当時の教会の礼拝も未信者にオープンであったことが分かります。その人々が来ることは歓迎されています。しかしこれはその人々向けの伝道集会ではありません。ここで言われているのは信者のいつもの礼拝です。そこに未信者が来ることはありました。そしてその人はそこで理解できる言葉で神の言葉を聞きます。その時にどういうことが起こるか。24節後半からの部分に「その人は皆に誤りを指摘され、皆に問いただされ、心の秘密があらわにされます」とあります。これはもちろん信者である人たちが寄ってたかって初心の人の誤りを指摘するという意味ではありません。これは信者たちの礼拝で、信者たちが語ることばを聞いている中で、初心の人にそういうことが起きるということです。

一つ目の「誤りを指摘され」とは自分の内にある誤りに目が開かれ、気づかされることです。それまでそんなことは思ったこともなかったのに、自分に何か問題があるとは全然思っていなかったのに、自分はいまやうまくやっているし、うまく生きていると思っていたのに、自分の内にも問題があるということを悟らされる。特に神の前で正しくない自分があるという事実が見えて来るということです。二つ目は「問いただされ」。これはさらに突っ込んで探られることです。色々言い訳があるかもしれませんが本当はどうなのか、さらに重ねて問われ、調べられ、きちんとした答えを要求される。そして三つ目は「心の秘密があらわにされる」。心の秘密とは他の誰にも知られていない自分の心の一番奥の部屋にしまっていることです。それは人には知られていませんし、自分でも気づいていないこと、気がつかないようにしていたことかもしれません。鍵をかけて、それは見ないようにしていたし、また忘れていたことです。ところがそれも神の前で明らかにされるのです。白日の下にさらされるのです。

なぜこういうことが起こるのでしょう。それはまず理解できる言葉で語られるからです。これは異言だけが語られる状況では起こり得ないことです。また預言、すなわち神の言葉はそのように私たちを探る力を持つからです。特に神の言葉には聖霊が働き、今見たような働きをされると言われています。ヨハネの福音書 16 章 8 節：「その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世の誤りを明らかにさします。」 またへブル人への手紙 4 章 12 節では、神の言葉についてこう言われています。「神のことは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄を分けるまでに刺し貫き、心の思いやはかりごとを見分けることができます。」人の言葉はそこまでの力を持ちませんが、神の言葉は私たちの思ってもみなかった醜い面までも抉り出し、さらけ出す力を持っています。そしてもう一つ、ここに「皆が預言をする」という状況でこれが起こると言われています。信者たちが互いに御言葉を語り合い、分かち合い、証しし合っているただ中で、未信者の方は今日見て来たような導きを受けるのです。そして「神が確かにあなたがたの中におられる」と言って、ひれ伏して神を拝むようになる。自らも神を礼拝する民に加わるようにと導かれる。こういう観点からも異言ではなく、預言がまさるとパウロは言っているわけです。

新しい年が今日から始まりました。私たちはこの年をどう生きるべきでしょうか。今日の箇所から二つのことを最後に短く心に留めたいと思います。一つは大人として

歩むということです。自分のことだけを考えて生きるのは子どもの生き方です。しかし大人は、自分の振る舞いは周りの人々にどういう影響を与えるだろうか、周りの人々の益に仕えることができるだろうかという観点から様々なことを考えます。その模範はキリストです。私たちが目指すべき成熟はキリストに似ることです。キリストに倣い、自分のことだけではなく他者を顧みること、その益に仕えることを求める者でありたいと思います。この点でさらに霊的な成長を遂げることを今年も自らの目標として掲げて歩む者でありたいと思います。

もう一つは御言葉が中心にある教会生活ということです。今日の箇所にも神の言葉には力があることが示されていました。それは未信者の人に対しても力を持ちます。しかし私たちは未信者の人にアピールするためにみことばを語り合うのではありませんし、「神があなたがたの中におられる」と認めてもらうためのパフォーマンスとして、このことをするものではありません。そうではなく、私たち自身が常に、普段から神の言葉に真摯に聞き、自分自身の罪が指摘され、問いただされ、心の秘密が明らかにされ、キリストに救いを見出し、心からの喜びと恐れをもって神を礼拝していることが大切なことです。それがまずしっかりあって、その上でそれを見た方々が「確かにあなたがたの中に神がおられる」と言って、聖霊に導かれて加わるようになるというのが順序でしょう。私たちはこの年も、御言葉こそが常に語られ、学ばれ、それを互いに語り合って、私たちの中心に御言葉があることを求めて歩みたいと思います。私たち自身がそれによって養われて、心から神への礼拝をささげ、互いに愛し合う歩みを導かれたいと思います。そして願わくは信じていない方々、初心の方々が来てくださって、「あなたがたの中に確かに神はおられる」と感じて、ともに礼拝に加わる教会であることができますように。神が私たちの間にいてくださり、そのことを喜びをもって証しする教会の歩みを今年も導かれてまいりたいと思います。